

1. 京都府

(1) 平成27年10月18日(日) 京都新聞朝刊25面

岩尾さん(左から5人目)の指導を受け、スティックを操る生徒たち。京丹波町豊田・須知高



「夢や目標が生きる力に」

ホッケーで技と心育もう

東京五輪へ 元日本代表京丹波で指導

2020年の東京五輪を見据えた選手育成と人間性を育もうと17日、京丹波町豊田の須知高でホッケー女子の元日本代表、岩尾幸美さん(39)＝大分・このえ緑陽中教諭＝の講演と実技指導が行われた。同高と町内にある中学校、スポーツ少年団の小学生計80人が手ほどきを受けた。

友情や努力の尊さなどを学ぶ「五輪教育」の醸成を目的とする府教委の調査研究事業。国際オリンピック委員会(IOC)認可の五輪研究センターがある筑波大の提案を受け、府内で初実施した。

岩尾さんは04年のアテネから3大会連続で五輪に出場した。高校でホッケーと出会い、五輪出場の夢を見つくるまで平凡だったという。講演で「夢や目標、目的があれば頑張る力になり、生きる道になる。それを進めば人と出会え、世界が広がる」と、ひたむきな姿勢の大切さを説いた。

ホッケー練習場では「周りを見てからパスしよう」など基礎を伝授。須知高2年の谷垣七海さん(17)は「ホッケーや日常生活に生かしたい。今の夢は京都で1番になること」と笑顔で話した。(内川和則)

府立高と支援学校 絆強く 与謝野で交流会

丹後地域の高校生に踊りを披露する
与謝の海支援学校の生徒たち(与謝
野町男山)



丹後地域の府立高と
与謝の海支援学校高等
部の交流会が31日、与
謝野町男山の同支援学
校であった。生徒たち
が意見発表や吹奏楽部
の演奏、踊りなどを通

じて親交を深めた。
丹後府立学校校長会
が毎年この時期に催し
ており、28回目を迎え
た。9校から計162
人が参加した。

最初の全体会では、
久美浜高生と同支援学
校の卒業生が、バリア
フリーや仕事に関する
意見を発表し、思いを
参加者に伝えた。

続く文化の集いで
は、加悦谷と峰山、久
美浜3高の合同吹奏楽
部が「風になりたい」
「栄光の架橋」「世界
に一つだけの花」など
を演奏。同支援学校の
生徒は「与謝の海ソー
ラン」を力強く踊った。
卓球台を使い、いす
に座って球を打ち合う
スポーツ「卓球ハレー」
やフオークダンスなど
も行われ、生徒たちは
多彩な企画を楽しみな
がら交流の輪を広げ
た。

(大西保彦)

障害者スポーツで交流

南山城地域の高校と南山城支援学校
高等部の生徒がスポーツを通して交流
する催しが7日、精華町山田の同支援
学校であり、共に体を動かし親交を深
めた。

地域交流を目的に毎年開催してお
り、南陽、木津、田辺、久御山、京都廣学
館の5校と同支援学校の約175人が
参加した。府のオリンピック・パラリ
ンピック教育モデル推進校に指定され
ている同支援学校が、障害者スポーツ
を広く知ってもらおうと企画した。

精華 南山城の5高と 支援学校の生徒

転がしたボールを的に近づけて点数
を競うポッチャや、卓球台を使い、椅
子に座ってピンポン球を打ち合う卓球
バレーのほか、ボウリングや輪投げな
どを楽しんだ。

同支援学校2年の二渡正樹君(16)
は「みんなで協力してできたので面白
かった」と話し、京都廣学館高3年の
八木香央里さん(18)は「初めてポッ
チャを知った。一緒にやってみると、
とても楽しかった」と笑顔だった。

(杉原慶子)



障害者スポーツのポッチャを楽しむ生徒たち
(精華町山田・南山城支援学校)

<p>女性アスリート 京で指導考える</p>	<p>開催する。</p>
<p>22日にフォーラム</p>	<p>田中さんの講演の後、国立スポーツ科学センター長の川原貴氏をコーディネーター</p>
<p>女性アスリートの競 技環境や指導を考える</p>	<p>に、シンポジウムを行</p>
<p>「京の女性スポーツフ ォーラム」が22日午後</p>	<p>う。アテネ・北京五輪</p>
<p>1時半から、京都市下 京区の京都産業会館</p>	<p>村加奈子北嵯峨高教諭</p>
<p>で行われる。ソウル五 輪シンクロナイズドス</p>	<p>や、仁川アジア大会の</p>
<p>イミング銅メダリス トの田中ウルヴェ京さ</p>	<p>水球女子日本代表監督</p>
<p>んによる講演などがあ る。</p>	<p>を務めた藤原秀規・鳥</p>
<p>京都府教委などが2 020年の東京五輪・</p>	<p>羽高教諭ら指導者をは</p>
<p>パリンピックに向け た教育、調査事業の一</p>	<p>じめ、重量挙げ日本高</p>
<p>環として、ジュニア選 手や指導者らを対象に</p>	<p>校記録保持者の柏木麻</p>
	<p>希(巨大、鳥羽高出)、 産婦人科医も参加す る。</p>
	<p>無料で申し込み不 要。問い合わせは府教 委保健体育科☎075 (414) 5864。</p>

女性アスリート
競技環境考える

京でフォーラム

女性アスリートの競
技環境や指導のあり方



女性アスリートの競技
環境などについて話し
合うパネリストたち

(京都産業会館)

を考える「京の女性ス
ポーツフォーラム」(府
教委など主催)が22日、
京都市下京区の京都産
業会館で開かれた。女
子学生や指導者ら約4
00人が、試合で実力
を発揮するためのメン
タルトレーニングや、
月経など女性特有の悩
みとの付き合い方を学
んだ。

ソウル五輪シンクロ
銅メタリストでメンタ
ルトレーナーの田中ウ
ルヴェ京さんが講演。
自らの経験を基に、自
分の感情を客観的に説
明できるとリラックス
できるよになると説

明し「適度な緊張がな
いと実力は出せない。
自分が緊張していると
認め、見つめ直すこと
が大切」と話した。

シンポジウムでは、
重量挙げ日本高校記録
保持者の柏木麻希(早
大、鳥羽高出)ら7人
がパネリストを務め
た。月経痛の競技への
影響が話題に上がり、
産婦人科医が、ピルは
月経が競技日に重なら
ないように調整できト
ーピング禁止物質にも
該当しないのに、日本
ではまだ普及していな
いと現状を報告した。

(田中俊太郎)

目標達成への努力大切

パラリンピックに6回出場し、競泳で金5個を含む21個のメダルを獲得した河合純一さん(40)が17日、綾部市岡町の綾部高で講演し、約120人の生徒に目標達成に努力する大切さを説いた。

河合さんは大学卒業後に全盲の人として全国初の普通学校教諭になったことや、5歳で水泳を始めたこと、出場したバルセロナ大会(1992年)以後のパラリンピックを振り返り、夢に向かって勉強や練習に打ち込んだことを語った。金メダルを生徒たちに示し、「自分で限界を決めず、目標を見つけたら具体的なイメージを持って努力するこ

パラリンピック競泳メダル21個の河合さん



「自分で限界を決めず努力を」と呼び掛ける河合さん(綾部市岡町 綾部高)

綾部高で講演 仲間の存在も重要

と、応援とともに喜んでくれる仲間が重要だ」と呼び掛けた。校内の温水プールでは、

同高水泳部員のほか中丹地域の支援学校高等部などの生徒も対象に泳ぎを指導した。(村尾之範)

(8) 平成27年12月30日(水) 京都新聞朝刊19面

京都府教育委員会などは2月11日に開く「オリンピック・パラリンピック教育フォーラム2016in京都」に合わせ、「京都府高校生短歌コンクール～オリンピック・パラリンピック讃歌～」の作品を募集している。

対象は府内在住か、府内の高校や特別支援学校高等部に在籍する生徒で、個人のほか学校単位でも応募できる。募集する短歌は、スポーツを「する」「観る」「支える」観点からの感動を表現した作品。1人3首までで未発表のものに限る。

オリンピック・パラリンピック テーマ

高校生の短歌作品募集

専用の応募用紙に必要事項を記入の上、〒604-8567 京都新聞COM「京都府高校生短歌コンクール」事務局宛てに郵送する。締め切りは1月12日(当日消印有効)。応募用紙は京都府教委高校教育課ホームページからダウンロードできる。優秀作品は、金剛能楽堂(京都市上京区)で行われる「教育フォーラム」で表彰される。

問い合わせは、「京都府高校生短歌コンクール」事務局(京都新聞COM内)
kyo-tanka@mb.kyoto-np.co.jp

スポーツ短歌 高校生表彰 上京でフォーラム

2020年東京五輪(心術を表した「笛が鳴(ベンチ)から聴く」)・パラリンピックに向け、スポーツと文化を融合した取り組みを京都から発信する「教育レガシー共創フォーラム」が11日、京都市上京区の金剛能楽堂で開かれた。高校生がスポーツをテーマに詠んだ短歌のコンクール受賞式や、五輪選手による講演が催された。



スポーツをテーマに詠んだ短歌コンクールで表彰状を受け取る高校生たち(京都市上京区・金剛能楽堂)

2020年東京五輪(心術を表した「笛が鳴(ベンチ)から聴く」)・パラリンピックに向け、スポーツと文化を融合した取り組みを京都から発信する「教育レガシー共創フォーラム」が11日、京都市上京区の金剛能楽堂で開かれた。高校生がスポーツをテーマに詠んだ短歌のコンクール受賞式や、五輪選手による講演が催された。

「驚きました」が、共感してもらって

うれしかった」と笑顔を見せた。講演では、小学2年で遭った交通事故の後遺症を乗り越え、北京五輪シクロナイスドスイミング代表になった石黒田美子さん(28)が「スポーツでなくとも夢に向かい、希望に向かい進んでほしい」と生徒らにエールを送った。フォーラムは、府教育委員会などが初めて催し、府内の生徒ら約200人が参加した。東京五輪に向け、来年度以降も高校生の短歌コンクールなどを続けていく方針。(日山正紀)

2. 福岡県

(1) 平成27年10月21日(水) 西日本新聞朝刊23面

はなしの横丁



地。地元の特産野菜に親しんでおると、11年前から枝豆収穫体験をしている。園児たちは刈り取った茎を手で、「この豆大きい」「早く食べたー」と話しながら、膨らんだ豆のさやを一つ一つむしって収穫した。

町の新宮東小で6年生148人全員を対象にあつた写真。国際大会で上位入賞の活躍を続ける立石さんは「一掃に夢を持つ」と呼びかけた。

立石さんはつま先に力が入らない先天性の障害があり、ふくらはぎの筋肉が発達していないため、足を使った強い動作ができない。

授業は「パラリンピック出場の実現し、自分がやることでほかの人たちにも頑張ろうという気持ちになつてほしくて、卓球を続けていく」と話した。

パラリンピックと五輪にはボールバウン、通訳、会場路などを多様なスタッフが必要なことと紹介。東京で五輪とパラリンピックがある2020年に向けて、みんなが夢を持ち、達成のため頑張ってくれたらうれしい」と力を込めた。

堺美彩さん(11)は「私も一生懸命、自分の夢に向かっていきたい」と話した。

アイマスクを着けた児童と着けていない児童
が手を握って体験したブラインドサッカー



田川小児童 アイマスク着け 視覚障害者の思い学ぶ

音と声を頼りにボールを操る視覚障害者のスポーツ「ブラインドサッカー」の体験教室が12日、田川市立田川小であり、4年生34人が参加した。

ブラインドサッカーは鈴入りのボールを使い、監督らの声も頼りにプレー。日本代表は2014年の世界選手権で過去最高の6位に入った。16年のリオデジャネイロ・パラリンピック出場は逃したものの、20年の東京パラリンピックでの活躍が期待されている。

同小では、九州ブラインドサッカー協会(福岡市)の堀田幸作理事(26)や九州唯一のチーム「ラッキーストライカーズ福岡」の森良太選手(31)が指導。2人一組になった児童は、交互にアイマスクを着けて相方に導かれながら、階段の上り下りや障害物をよける歩き方を練習。ドリブルや試合も体験した。

巧みなドリブルやミドルシュートを披露した森選手は「私のように目が不自由でもサッカーができる。みなさんも自分の目標に向かって頑張ってください」と語り、堀田理事は「こういう接し方をすれば視覚障害者が安心するかもしれないと思う。普段、友達と接するときにも生かし、思いやりを大切にしてほしい」と語った。

餅屋明衣さん(10)は「アイマスクを着けて歩くのは怖かった(視覚障害者に)導かれたら、何か困っていることがないかを助けたい」と話した。

(中川博之)

ブラインドサッカーを体験

ブラインドサッカー
アビのコーチと体験
同里町戸切小
2016年の東京五輪・
パラリンピックを記念し、
スポーツを通じて子ども
の人間性を育てようと、同里町
の戸切小(松山崎校長、
78人)で13日、福見選手
向けの「ブラインドサッカ
ー」の体験教室があった。
全道大会に参加し、1月のア
ビ入賞のコーチからル
ールを学んだ後、目標を
してうれしに帰った。
同校の「オリンピック・パ
ラリンピック教育推進専
門の一環で、東京五輪
を目指す小なが企画した。



ブラインドサッカーは鈴入 指す健児。パラリンピ
アのボールを使い、監督の
指導で、15年のリオ
デジャネイロ大会の出場
の夢を掲げ、20年の東京大会

アイマスクを掛け、ヘア
で声を掛け合いながらボ
ールをキックする戸切
小の児童

での活躍が期待されてい
る。
同教室で児童たちは2人
1組となり勝敗を体験。ゴ
ールキーパー以外は手を使
えないが、この日は特別に
転がってきたボールをキッ
クするなどして楽しん
だ。
藤井コーチは「努力し
合えばサッカーができる。
みんなも個性や障害を認
め、助け合ってほしい」と
呼び掛けた。6年の花田
優希(ひ)は「目が不自由
な人の大変さが分かった。
取っ組み合いは嫌いだ。な
ど悪いやり方がある行動をし
たい」と語った。
(以下 藤井 氏)

「10年打ち込めば
大きな成果得る」

福岡市で石原さん講演

メキシコ五輪マラソンで
銀メダルを獲得した石原健
二さん(74)は北九州市IIが
7日、福岡市で「ゴール無
限」と題して講演した。石
原さんは、小さな努力を積
み重ねて劣等感を克服した
経験を語り、「二つのこと
に10年、一生懸命打ち込め
ば、大きな成果を得ること
ができる」と語った。

石原さんは高校卒業後、
当時の八幡製鉄に入社。「一
流選手たちに囲まれ劣等感



小さな努力の積み重ねの大
切さを語った石原健二さん

でいっぱいだったと振り返る一方、「もう一層走る」「あの標柱まで走る」と努力を続け、目標を達成した体験談を披露した。

石原さんが講演したのは、五輪とハランピックの理念をテーマにした公開討論会「教育レガシー共創フォーラム2016」(福岡) (筑波大主催、西日本新聞社など後援)。講演後、石原さんや元五輪選手などによる「オリンピック・ハランピックがたなごころ・地域・世代」と題した討論もあった。

筑紫野中

「夢を持ち人生変わった」 視覚障害ランナー道下さん講演

一方が自分さえ扶輪でロープを
握り合って走る難しさを体験する生
徒と講師の道下さん(中央)



今年9月のリオデジャネ
イロパリンピック視覚障
害女子マラソン日本代表候
補、道下美里さん(38)と伴
走者の堀内規生さん(35)が
2月25日、筑紫野市新築東
の筑紫野中で1、2年生生
徒10人に講演した。

2人は、輪にしたロープを
握り合って走って登場。始
内を軽快な動きで一周した
道下さんは「世界の頂点を
目指している視覚障害ラン
ナーで主眼をしていますが」と
自己紹介。講演では「た
きないことに執着するの
ではなく、できることを見
つけて努力することが大
事。私は夢を持ち始めて
人生が変わった」などと語
った。

アイマスクの生徒を導く
体験コーナーもあり、生徒
は伴走者の的確な助言の大
切さを体感していた。